昇試第一部漢字課題　（九月二十二日締切）

A

鈴木静村書

風來蘋末聊自快　暑滿人間無處逃（龐鑄）

風は蘋末に来りて聊か自ら快とす、暑は人間に満ちて逃るる処無し。

B

概観

墨がなくなったので、かすれが連続し、かすれっ放しという作品では、線に味も素っ気もなくなる。渇筆線中の適所に、墨の表われがなければ枯れ木の山肌と同じ。この場合、渇筆の用筆では速度の弛め加減は当然。さらに入筆での〝突き筆〟、脈絡での〝受け筆〟、転折・屈曲の場合の〝捻筆〟等を活かし用筆するという基本の手法に習熟することを望みたい。

主な文字について

風　内部の書き方いろいろあり。**來**　古典には〝来〟断然多い。**末**　「書譜」から拝借。**聊**　B末画は弱く失敗。**自**　墨継ぎ、**快**〝忄〟左点は離す。A旁〝夫〟に見えないように。**満人**　連綿、〝人〟末画の入筆相違。**間**　墨の表出に工夫を。**無**　墨継ぎ、両作共硬い。リズミカルに。**逃**　之繞をのびやかに　〈渇筆参考〉A聊満間處逃　B人間逃

訳…微風は浮草の葉末におとずれて少しは心をよくするも、酷暑はこの世に満ちて避ける地もない。

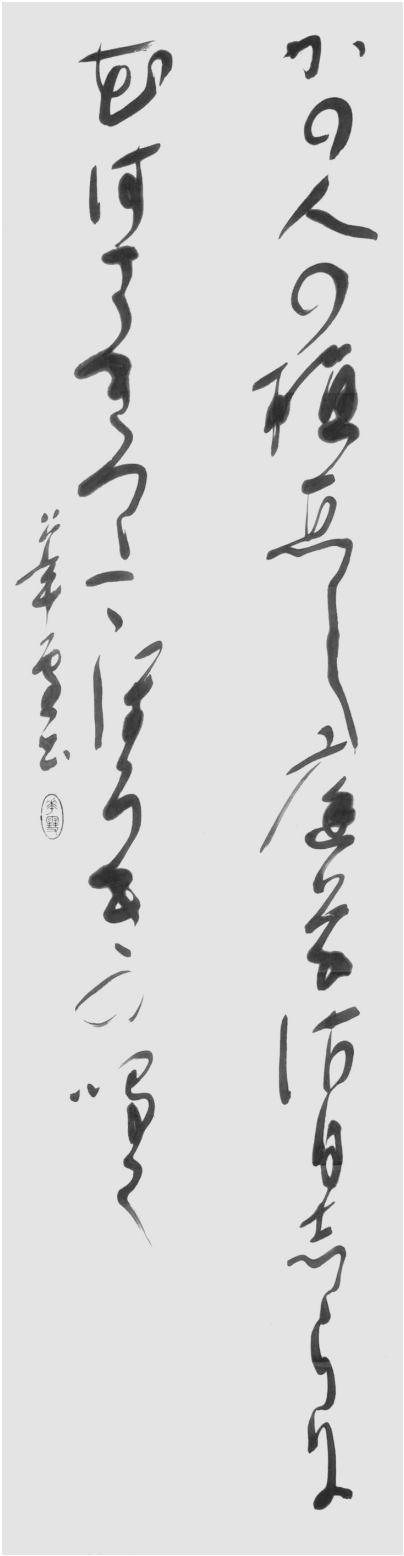
予告（十月二十二日締切）　**南軒吾所愛　夏日倚薫風　坐見長流水　吾心渺不窮**（頼春水）

◆**注 意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第一部かな課題　（九月二十二日締切）

A

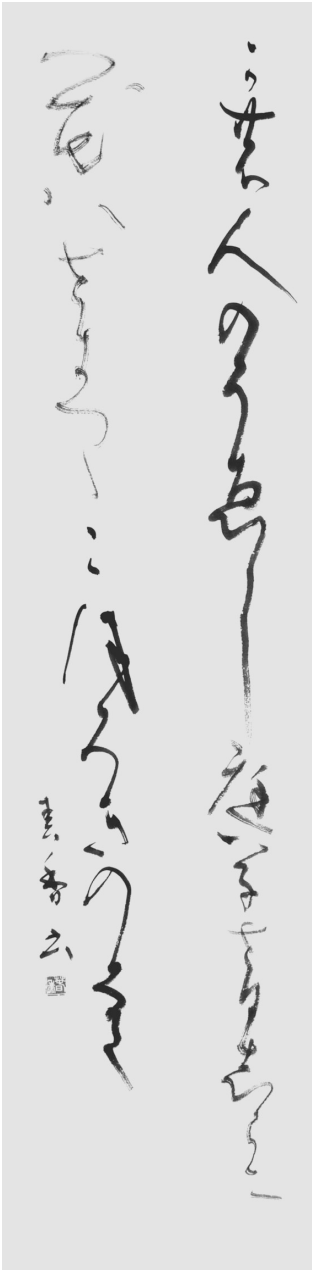
平岡華雪先生書



かの人の植ゑし庭草さびしらに花は咲きつつこほろぎの鳴く（伊藤左千夫）
かの人の植恵し庭草佐日志ら尓花はさきつゝこほろきの鳴久

B

石原春香先生書



可農人のうゑし庭草さ日志ら二花八さ支つゝこ保ろきの奈久

学び方

A　日頃かな字典をどのくらいめくっていますか。お手本を見てまず疑問を持つ事も大切です。それはお手本が悪いという事ではありません。「の」が続いた場合、形をかえてみる、他の「の」を使ってみるとどう変わるか、それと行のゆれをどう表現するか等、考えれば色々と出て来て字典が必要になります。

二つの「の」の変化、筆鋒の回転はむずかしいですよ。「植」「庭草」「花」の漢字と仮名の調和も考えましょう。「植ゑし庭草」は文字の字幅で「こほろぎの鳴久」は連綿線と太細で行のゆれを感じます。「佐日志ら尓」は動きがややほしいです。二行目の「き」「つ」「こ」の第一画目は筆圧、方向、長さが同じなのでやはり線の太細、長短を考えて書いてみて下さい。

B　「うゑし」太くボリュームを。五・六月号の様に補助線を入れてみて下さい。〈〉の変化を。「さきつゝ」は筆をくりんくりんと回転させ書いて下さい。「こ保ろきの奈久」「の」をのばす事により明るく。

書いたら必ず掛けて見ます。意外と書いた時よりうるさく感じます。そしたらちょっと控えて。白が美しく見えて来ます。

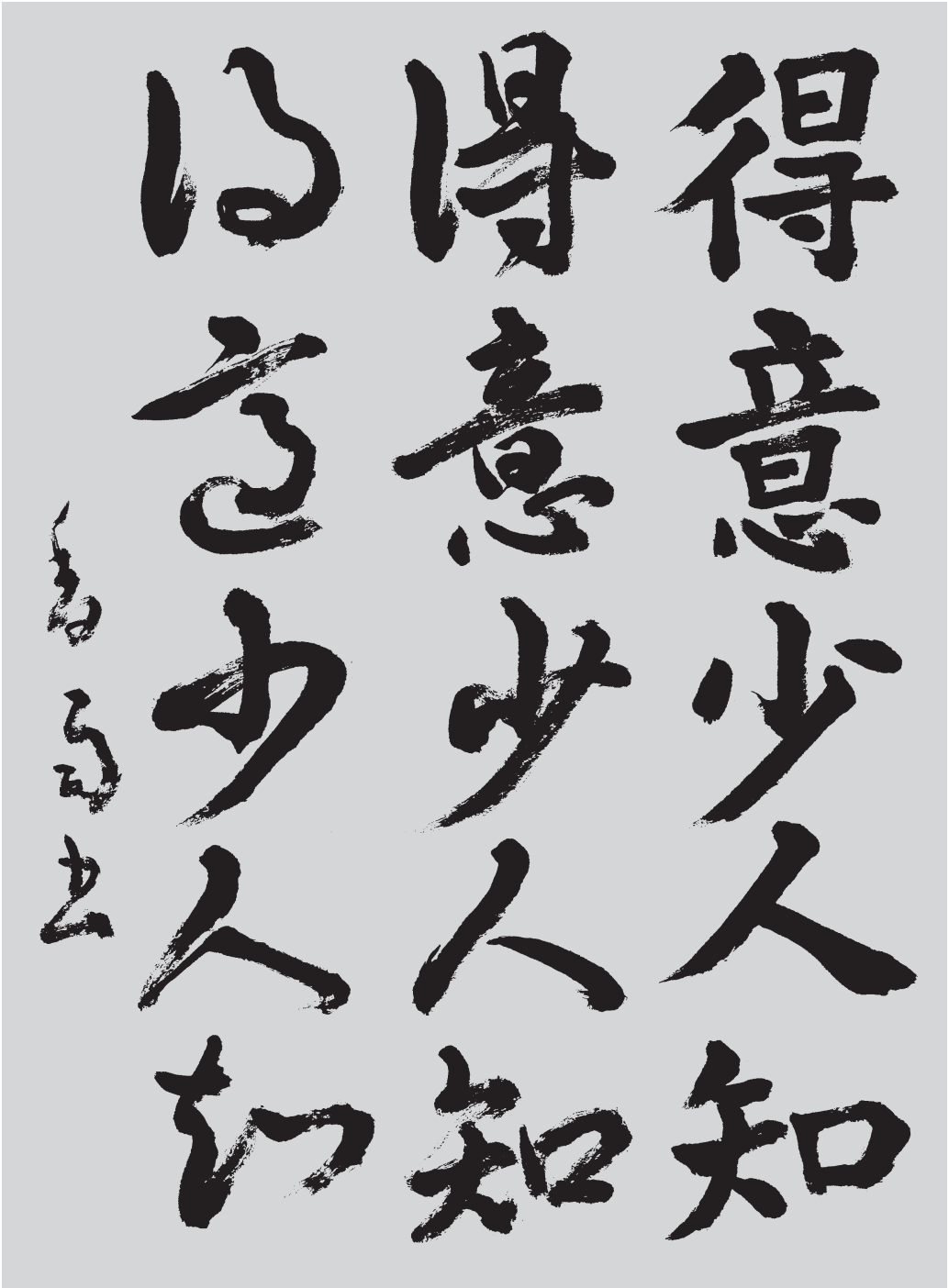
予告（十月二十二日締切）　ふるさとはつめたき土のにほひしてこほろぎのなくうす月夜かも（前田夕暮）

◆注意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部漢字課題　（九月二十二日締切）

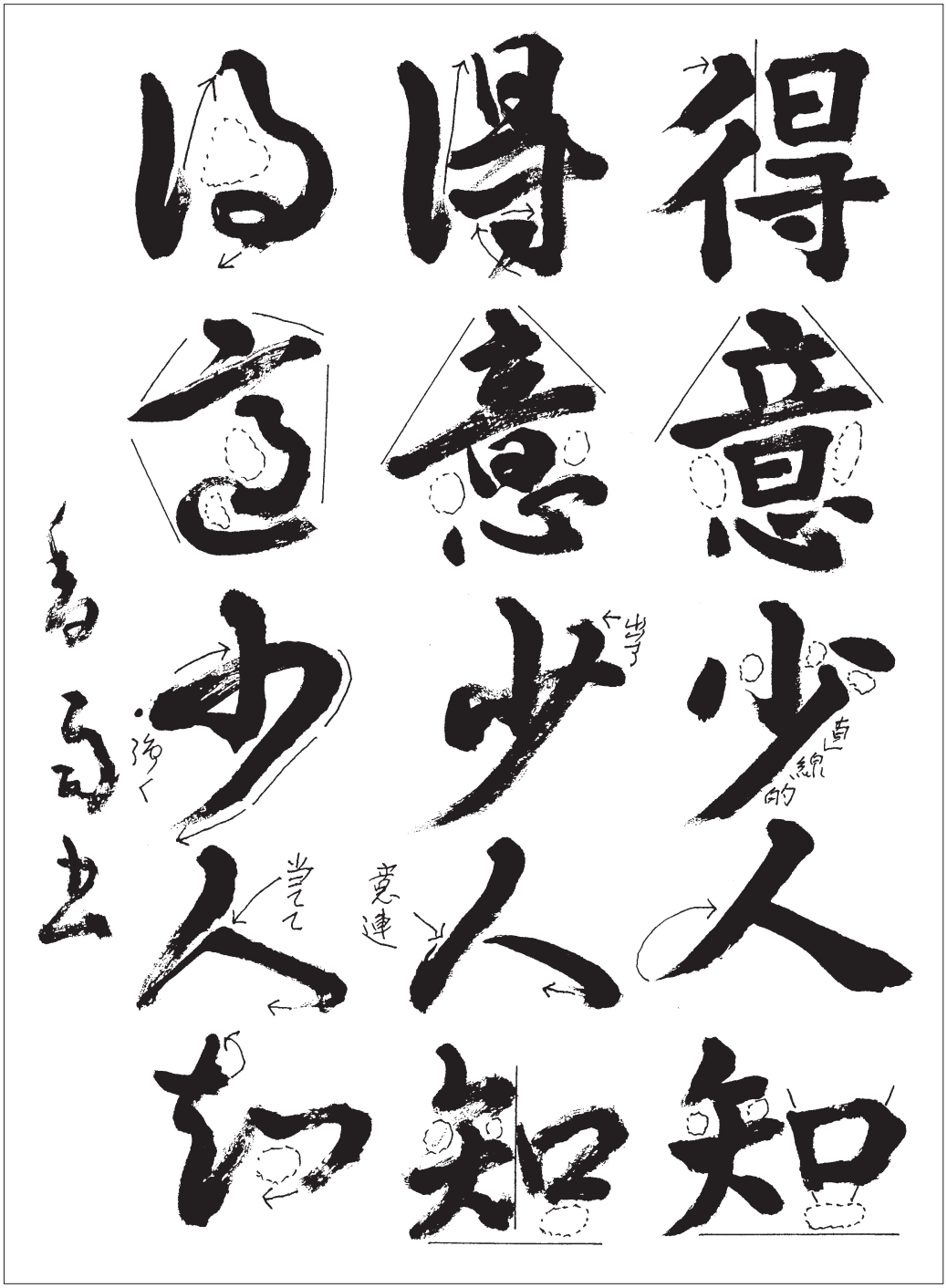
酒井香雨先生書

得意少人知（華嵒）
得意人知る少なし。

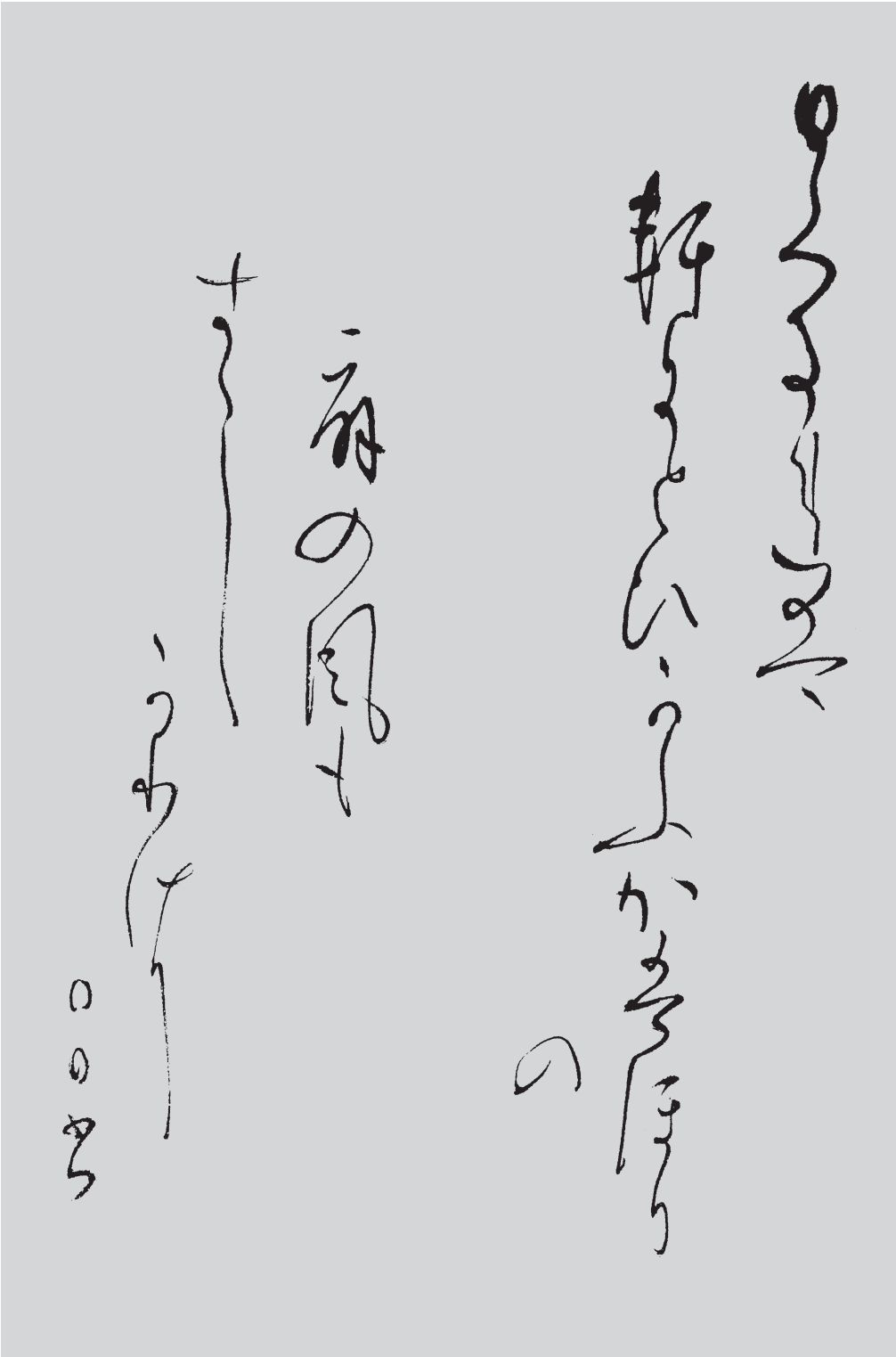


訳…意の如くなって満足することを人の知るはまれである。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。


得意少人知
得意少人知
得意少人知
点線的
意連
当て

昇試第二部かな課題　（九月二十二日締切）

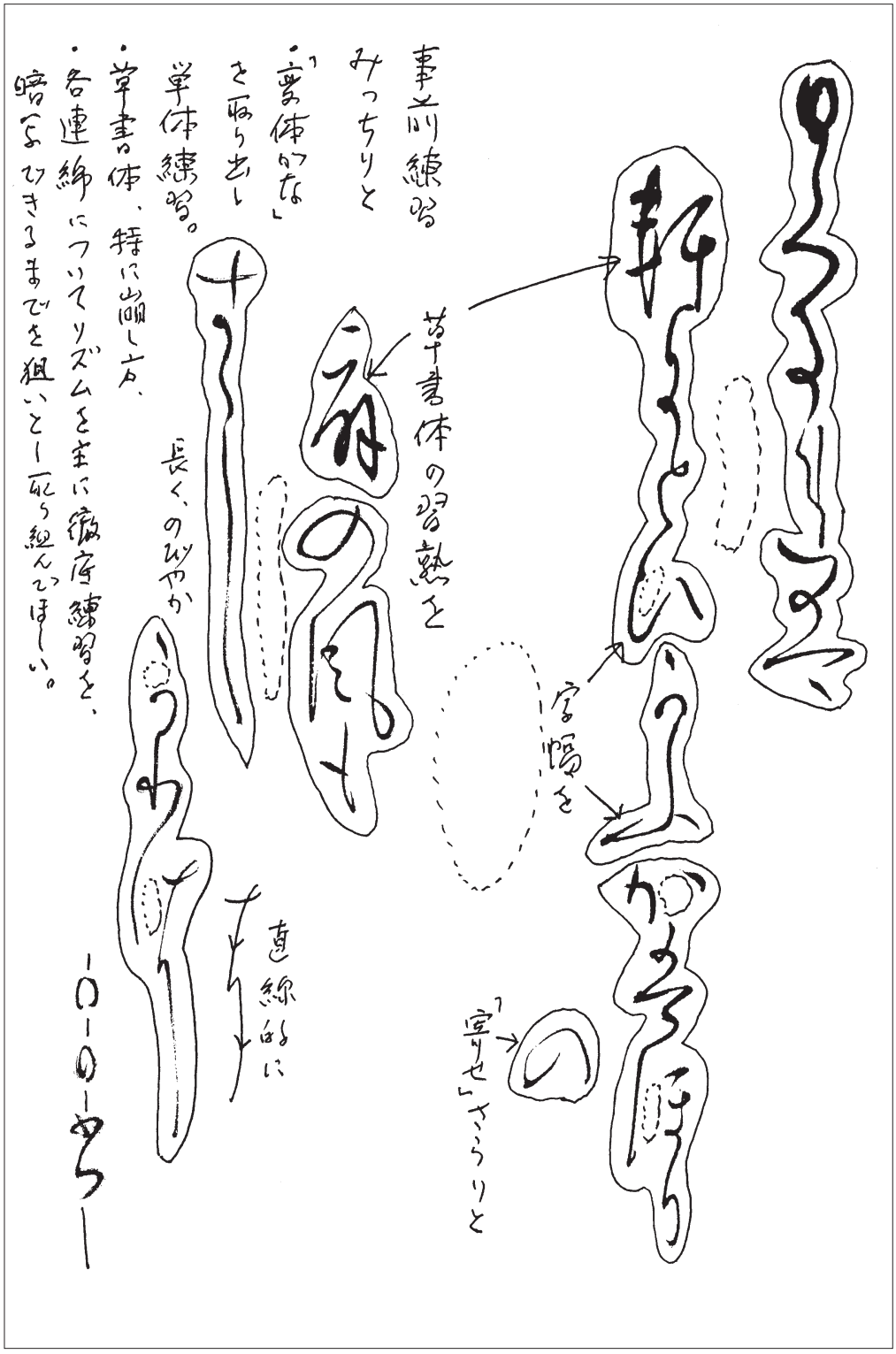


高塚竹堂先生書

日くるれば軒にとびかふかはほりの扇の風もすずしかりけり（新後撰和歌集　後徳大寺左大臣）

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部かな課題　解説　鈴木静村

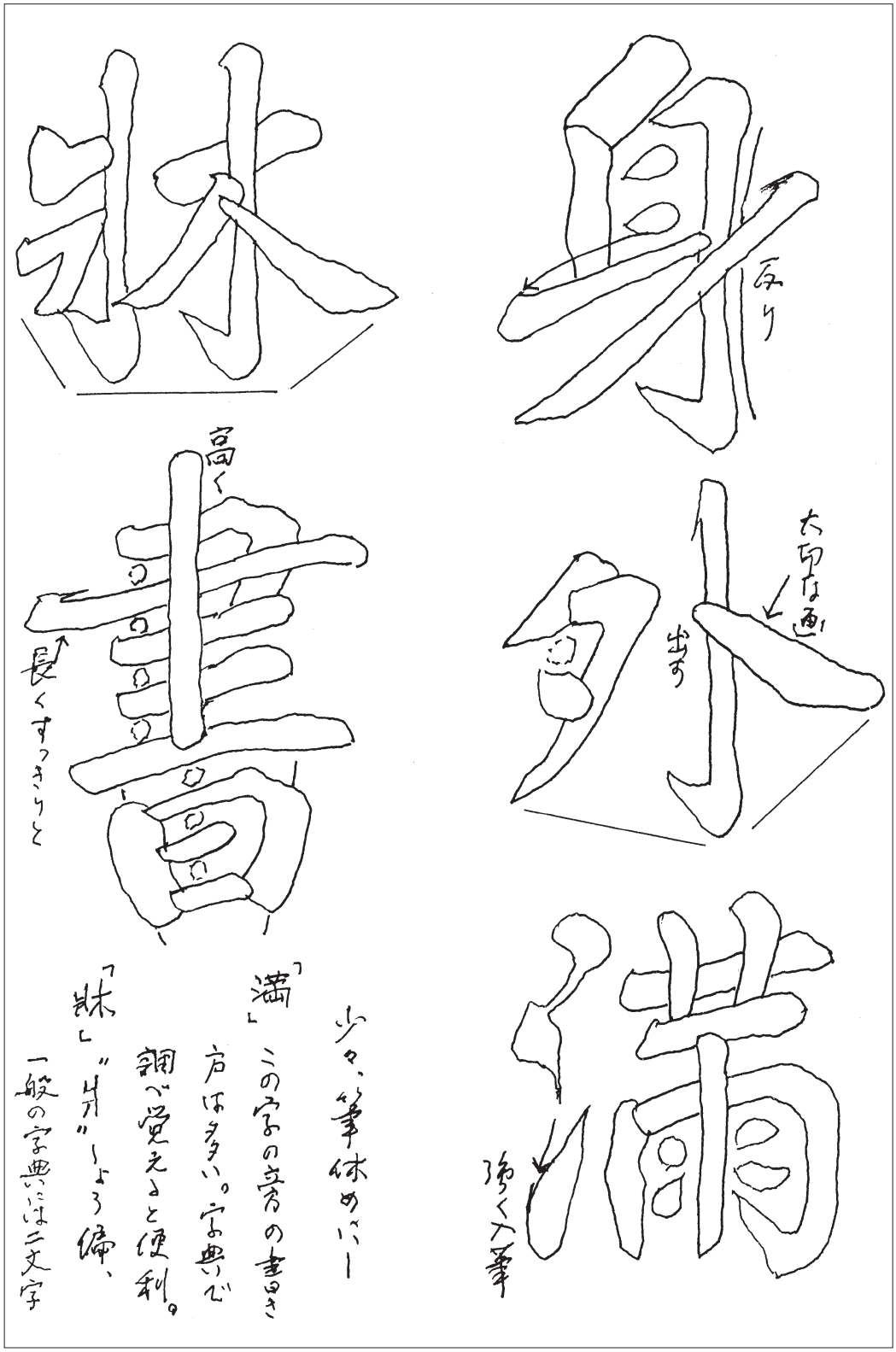


平岡華雪先生書

身外満牀の書（杜甫）

訳…室内は蔵書に満ちている。

◆注意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。


反り
大切な画
出す
高く
長くすっきりと
強く入筆
少々、筆休めがいい
「満」この字の旁の書き方は多い。字典で調べ覚えると便利。
「昧」"爿"ようう偏、一般の字典には二文字

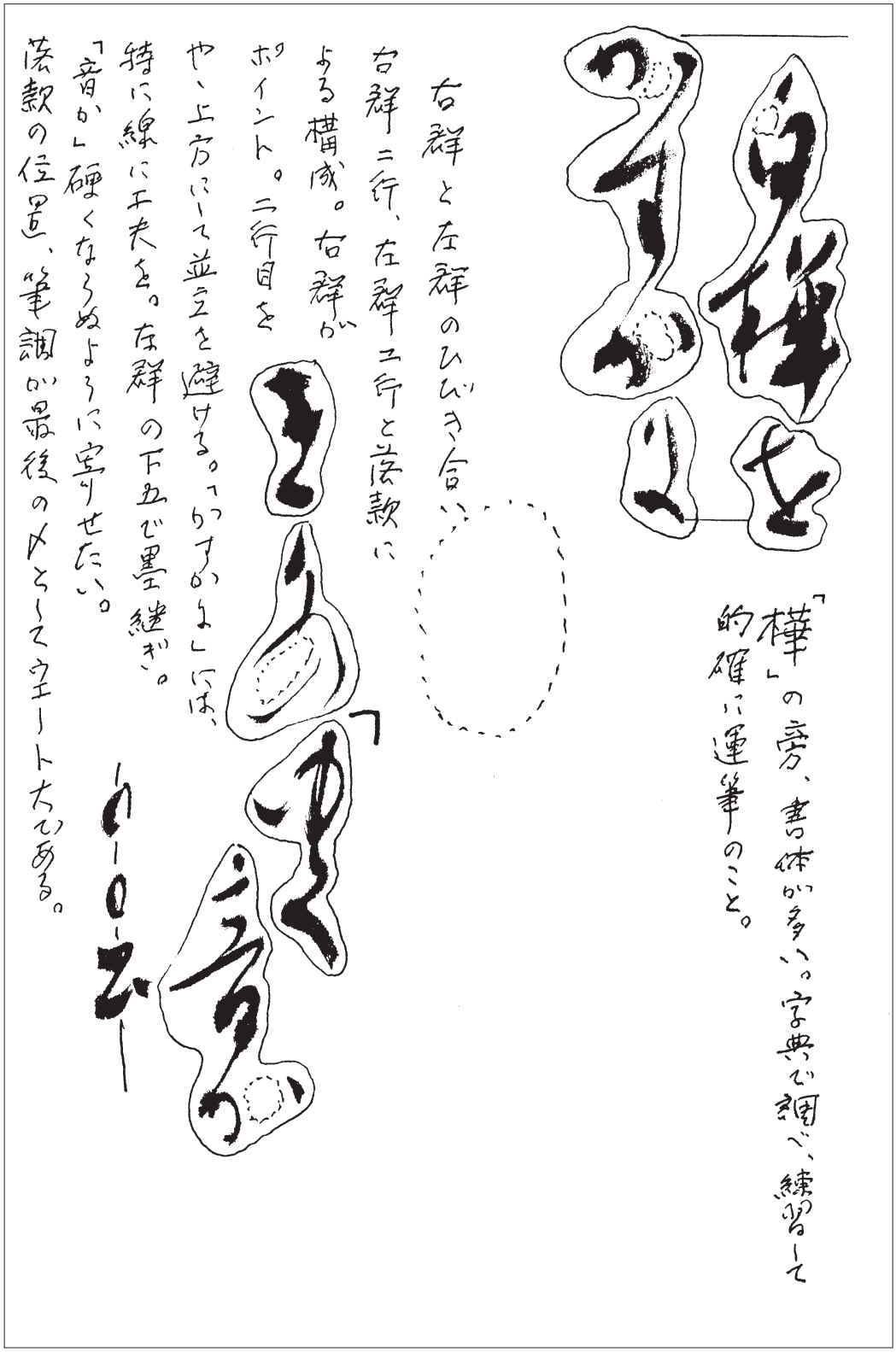
昇試第三部かな課題　（九月二十二日締切）

平岡華雪先生書

白樺を幽（かす）かに霧のゆく音か（秋桜子）

◆注意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部かな課題　解説　鈴木静村



水貝潮華先生書

柳絮乗風投硯水　竹枝揺影落窓紗（瞿佑）

柳絮風に乗じ硯水に投じ、竹枝影を揺かして窓紗に落つ。

訳…柳の花は風に吹かれて硯池の中に落ちた。竹の枝は影をゆらつかせて窓かげにうつる。

北島菁丘先生書

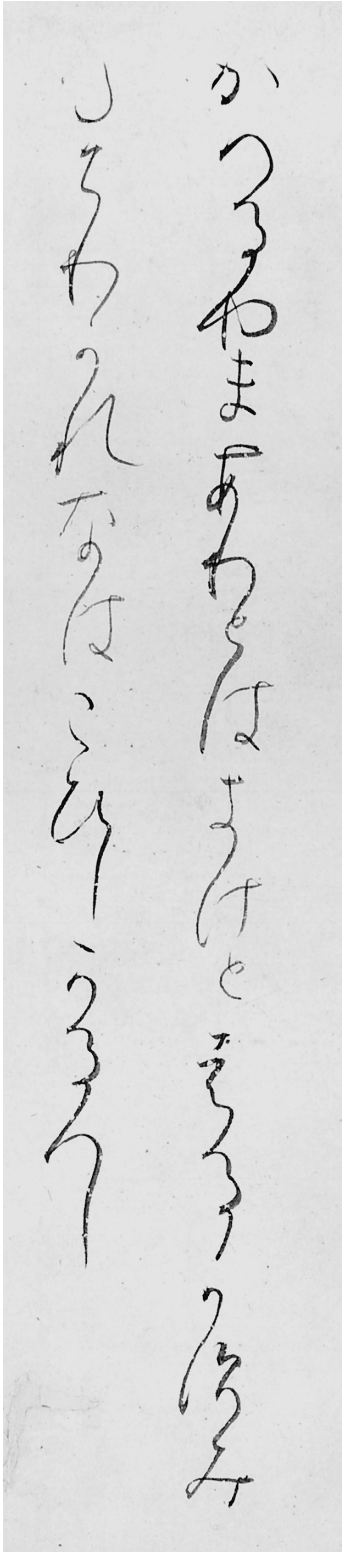
おしなべてものを思はぬ人にさへ心をつくる秋のはつ風（新古今和歌集　西行法師）

おし那邊て物を於も者ぬ日と耳佐遍こゝろ越つくる秋の初可世

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

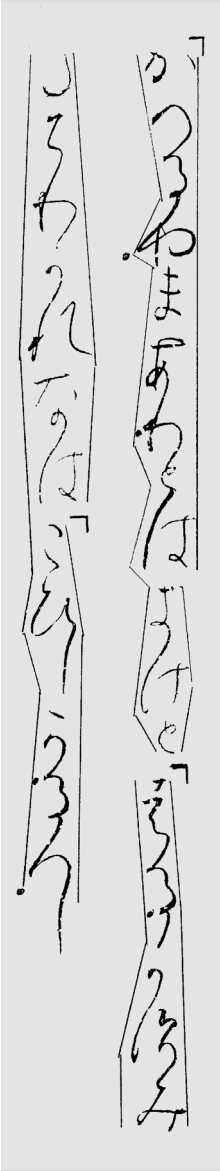
昇　試　随　意　参　考

川上香蓉先生担当　**高野切第二種**　伝紀貫之筆（二玄社）



かへる山ありとはきけど　春霞
たちわかれなば恋しかるべし

かへるやまありとはきけどはるがすみ
たちわかれなばこひしかるべし



〈まとめ〉

「高野切第二種」も最終回となりました。半切の創作をする時に参考としていただきたいポイントが色々出てきましたが、それらを加味しながら自運の作品に取り入れていただきたいと思います。

仮名の場合基本として古筆の臨書を徹底して学習する事が大切だと思います。初めは原寸で全臨という事でなく自分（または指導下さる先生の指示もいただいて）が書いてみたい箇所を部分的に拡大して臨書するのも必要だと思います。それではどの様な古筆があるか参考までに書いておきます。

1、粘り気のある線質で、多彩な表現が見られる（例「関戸本古今集」「本阿弥切」）
2、細く鋭い線質で鋒先を駆使している「細身の古筆」（「小島切」「針切」「香紙切」）等
3、漢字とかなの調和が美事（「元永本古今集」「巻子本古今集切」）
4、散らし書きで余白の美しい「三色紙」系（「継色紙」「寸松庵色紙」「升色紙」）
5、軽妙で暢達な筆致（「一条摂政集」「中務集」）
6、女手の仮名とは雰囲気を異にする「草仮名」等（「秋萩帖」「綾地切」）

いづれにしても、原帖を見て自分の好みに応じた古筆を自分のものとして消化し、作品作りに役立てていただきたいと思います。

〈ポイント〉

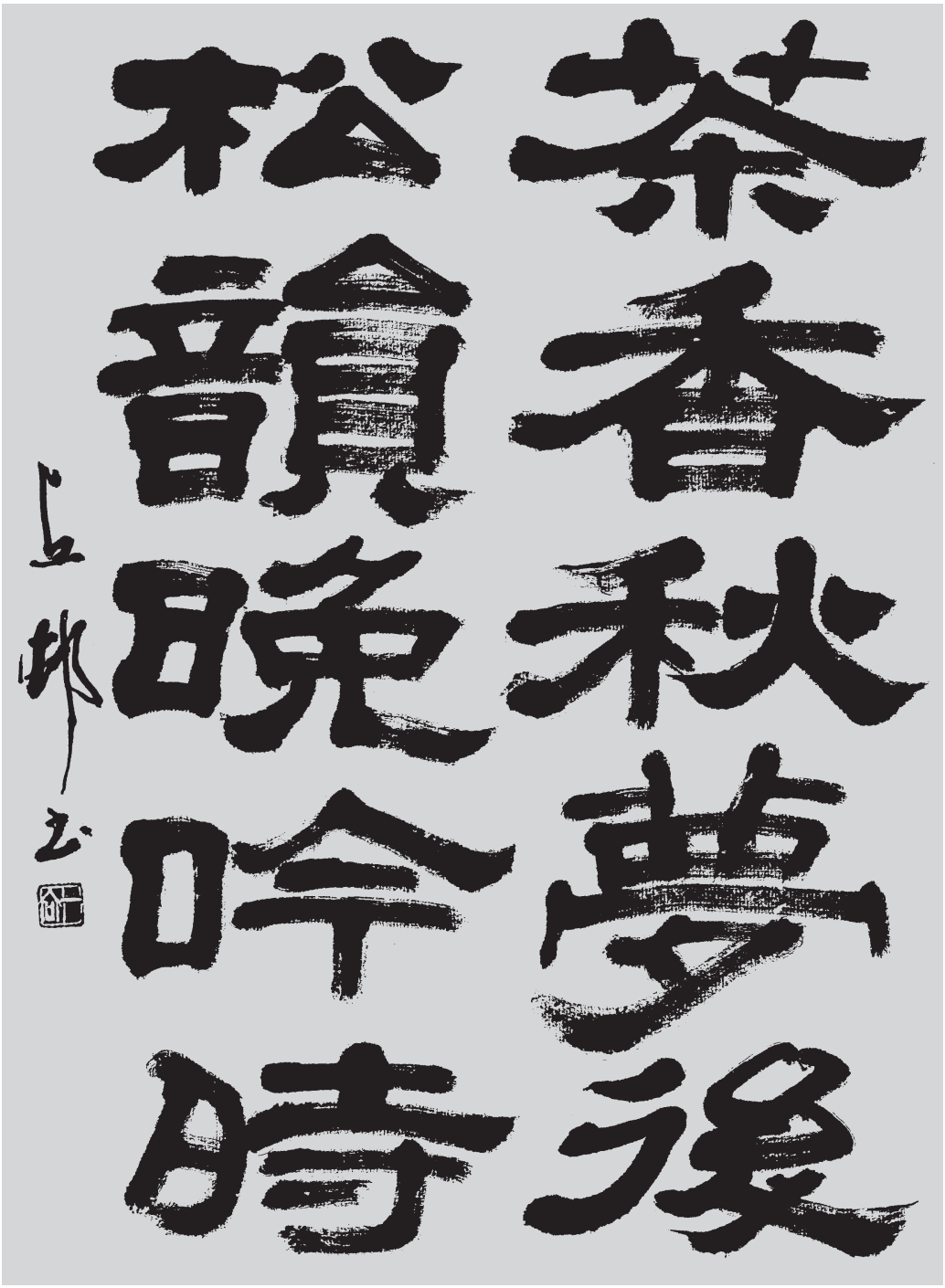
比較的動きのある歌で、墨の濃淡の対比が美しい所です。条幅の作品に重要な潤渇の変化と左右の行の流れも響き合い、放ち書きの部分も効果的です。

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

戸張丘邨先生書

茶香秋夢後　松韻晩吟時（許渾）

茶香秋夢の後、松韻晩吟の時。



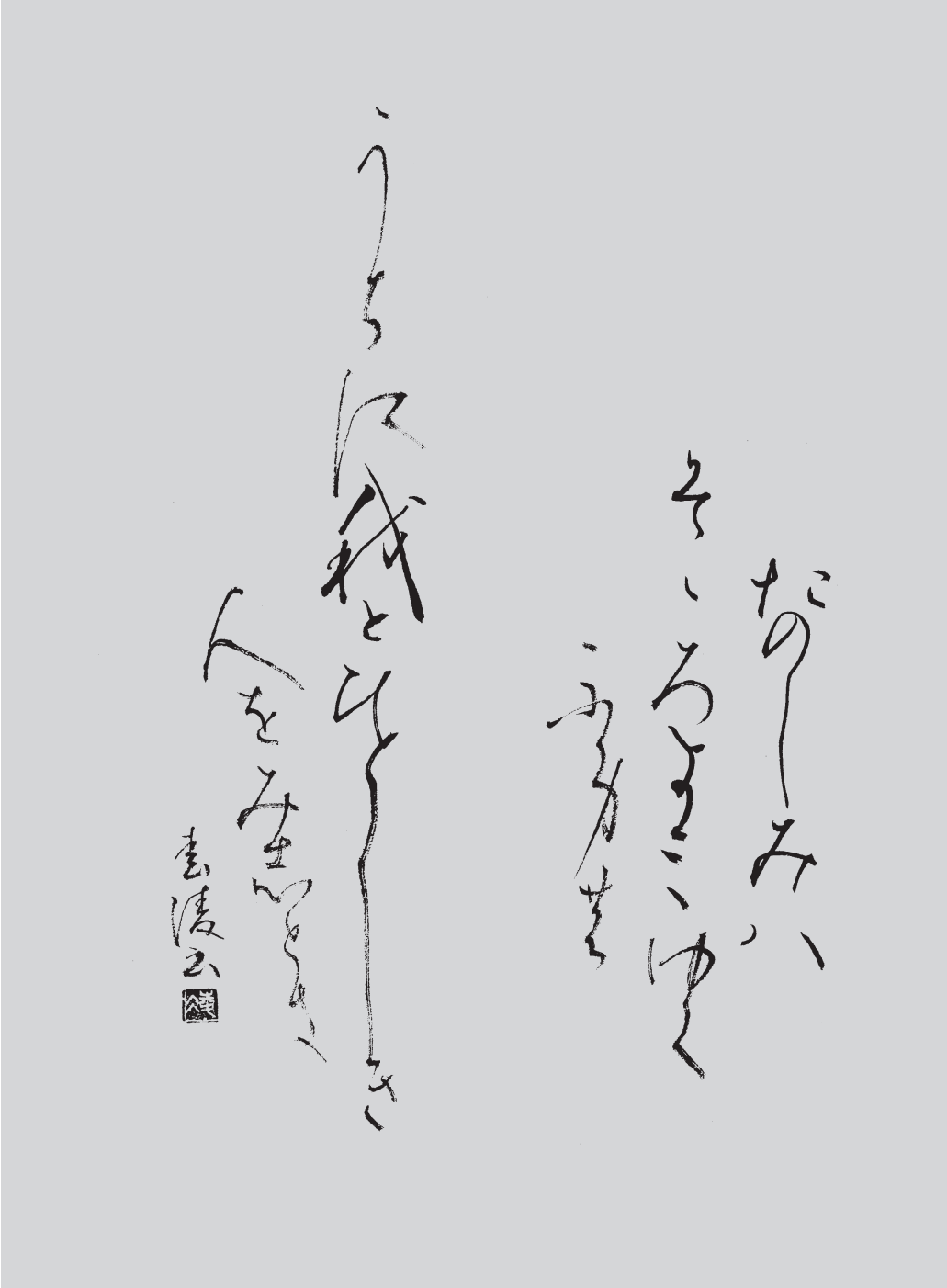
訳…茶が煮える香りに秋昼の夢がさめ、松風の音は夕ぐれに詩を吟ずる時がよい。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

武井春凌先生書

たのしみはそぞろ読みゆく書の中に我とひとしき人をみし時（橘　曙覧）

たのしみ八そゝろよ三ゆくふ身農うちに我とひとしき人をみ志と支

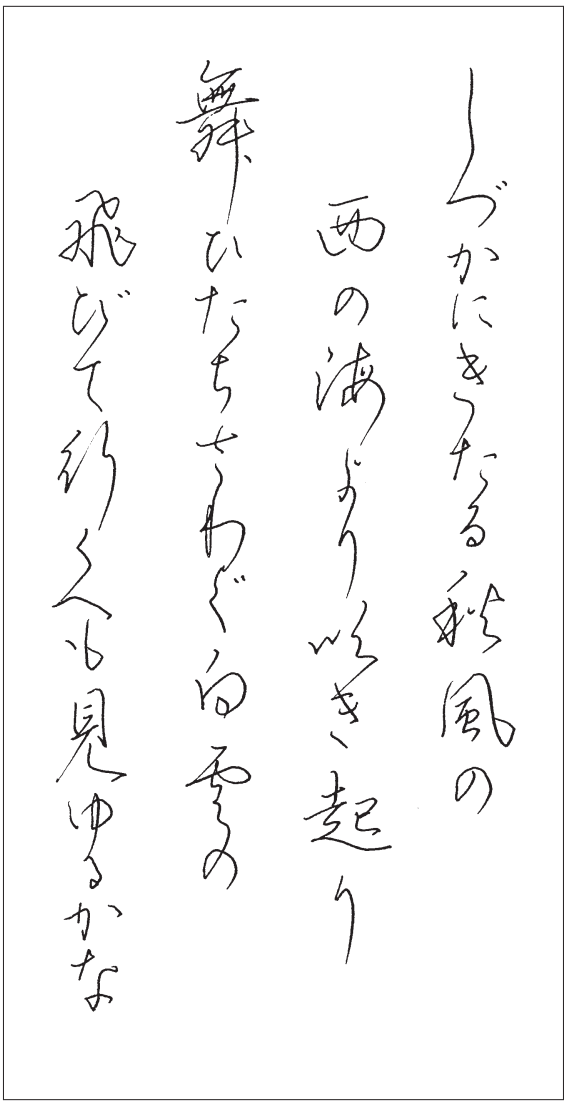


◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考　（九月二十二日締切）

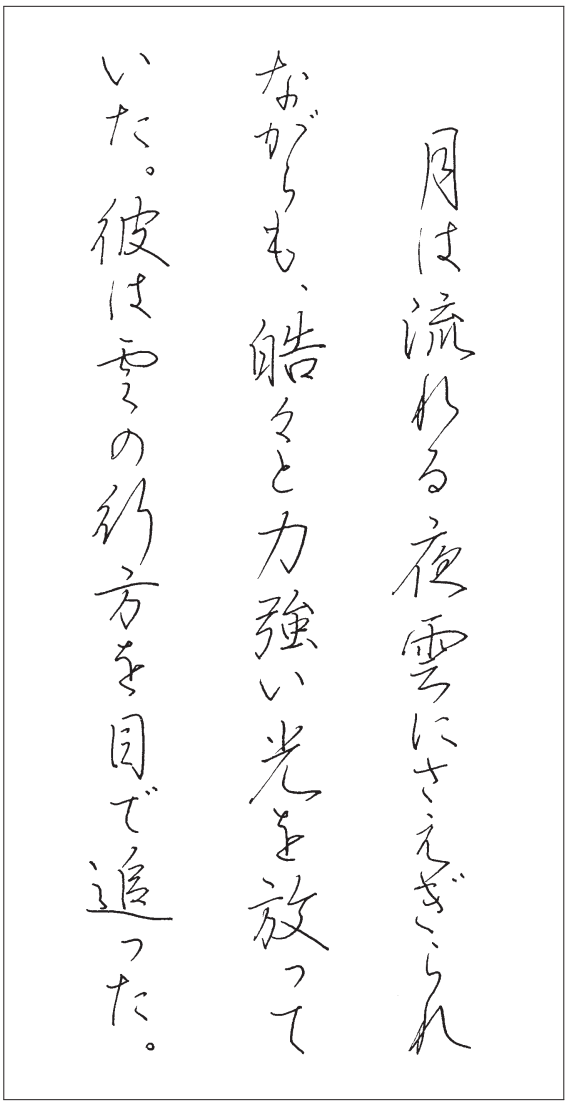
路川千曄先生書

課題1（初段以上）



路川千曄先生書

課題2（初段格以下）



課題1（初段以上）

しづかにきたる秋風の
西の海より吹き起り
舞ひたちさわぐ白雲（しらくも）の
飛びて行くへも見ゆるかな

「秋風の歌」　島崎藤村

◆注意

(1) 自分の段級に合った課題を選択。
(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。
(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）
(4) はじめて出品される方は私製の紙（3×4㎝位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
(5) 会員は無料・会員外は四〇〇円
(6) 添削希望者は直接担当の先生にお申込下さい。（返信用封筒に自分の住所・氏名を記入し、切手を貼って同封のこと。）

課題1　六〇〇円
課題2　三〇〇円

課題1　路川千曄先生
課題2　〒二〇七―〇〇一三
東大和市向原
五ノ一〇九一ノ四

課題2（初段格以下）

月は流れる夜雲にさえぎられながらも、皓（こう）々と力強い光を放っていた。彼は雲の行方を目で追った。

「白秋」　伊集院　静